

我が家の庭

若狭 寿美子 静岡県富士市 六十一歳

毎年五月になると、澄み渡った青空と香る風に誘われ、庭に出る。即席のテーブルをセットし、広げたパイプ椅子に腰を下ろす。今を盛りと咲く花々と新緑をたたえた木々を愛でながら、この季節だけが持つ、さわやかな空気を思いきり吸い込むと、生きる力が私にしみこんで行く気がして元気が出る。うつむきかけた心に、物言わぬ植物が養分をくれる。吹く風は花や木に優しく、青い空から降り注ぐ光は穏やかだ。五月、花と緑で溢れ返った我が家の小さな庭は、眩しいほどに活気づく。「五月の庭に乾杯!」。そんな気持ちを抱きながら、もう一度大きく息を吸い込む。「庭を造って良かった」。毎年のようにそう思う。

家の入口から玄関まで続く数メートルの通路は、二十数年前に夫が造ったものだ。自分で設計図を描き、煉瓦を切り、一個ずつ積んだ。若くて元気な夫が、黙々と芝を張り、煉瓦を敷く姿が、花と木の向こう側に浮かび、懐かしさで一杯になる。

当時、私は庭造りを何も手伝わなかったと、今更ながら悔やんでいる。庭造りに参加していたならば、庭への思いはより深いものになっていたに違いない。庭造りに励む若い夫を思い出しながらコーヒーを口にふくむと、いつもよりずっとほろ苦い味がした。

過ぎた時の断面をたぐり寄せる時、人はその影に何を重ねるのだろうか。庭の花や木は、私の過ぎた日々々に寄り添うように、ふりそそぐ五月の光と、さわやかに頬なでる風の中で揺れながら輝いている。